例示の助詞タリ、ナンカの語用論的効果

大和 啓子

1. 注目する現象と本稿の目的

本稿では、次のような、助詞のタリやナンカが用いられる現象を扱う。

- (1) a. その本、ちょっと貸していただけ
たりしませんか。
b. よければサインなんかしてもらえないでしょうか。
c. 突然でほんとうに申し訳ないんですけど、来週のゼミ発表かわってもらえたりなんかしませんか。

(1) の場合、いずれもタリ、ナンカを用いなくても、(2) のように同じ内容の依頼をすることが可能である。

- (2) a. その本、ちょっと貸していただけ
ませんか。
b. よければサインしてもらえないでしょうか。
c. 突然でほんとうに申し訳ないんですけど、来週のゼミ発表かわってもらえませんか。

タリやナンカを用いた場合(1)と用いない場合(2)とでは、話者の態度の違いを感じ取ることができる。従来、タリやナンカは、「限定や断定や個別性を回避」し、「他者との摩擦を避ける」(村田(1994))効

果があるとされ、ぼかし表現や和らげ表現として扱われている。

しかし、なぜ、これらの形式を用いることによって、このような話者の態度が表わされるのだろうか。また、タリやナンカには、ぼかし表現や和らげ表現のような、他者との摩擦を避ける効果とは異なる語用論的効果もあるのではないだろうか。

たとえば、森山(1995)では、「タリシテ」というかたちで冗談の用法があることを指摘している。

- (3) うどんにマヨネーズをかけたりして。
(森山 1995:140)

また沼田(2000)では、一つの要素に付くナンカをとりたて詞としてとらえ「擬似的例示」(4)「否定的特立」(5)という用法として、次のような例をあげている。

- (4) 竹本さんなんか、来春結婚する10組の中にはいっているんじゃないの。
(沼田 2000:194)

- (5) よりにもよって、太郎なんかが僕の誕生パーティーにやってきた。
(沼田 2000:195)

このように、タリ、ナンカを用いると、それがないときには感じられない一定

の語用論的効果が生じる。本稿では、このようなタリやナンカの持つ様々な語用論的効果と、ぼかし表現にある、いわゆる丁寧さのような効果以外のものが同時に説明可能となるようなメカニズムを明らかにすることを目的とする。具体的には、タリ、ナンカ両者の持つ例示的用法に着目し、それぞれの例示のタイプを明らかにし、それによって、それぞれの文脈でどのように効果が生じるのかを説明する。

2節では、まずタリ、ナンカが本来、複数の要素を扱う形式であることを先行研究から確認し、3節では両者がともに質的例示用法を持つという点を確認する。

2. 複数要素を扱う形式タリ、ナンカ

2.1 並列結合のタリ

寺村(1991)では、タリについて複数の事態を並列的に示す述語形式として、非対称的な動作を並べて示す場合(6)(7)と対称的な動作を並べて示す場合(8)(9)があることを指摘した。

- (6) 土曜日はテニスをしたり、小説を読んだり、ギターをひいたりして過ごします。
- (7) そのころは、父の店の手伝いをしたり、簿記を習いに行ったりしていました。
- (8) 明日は雨が降ったりやんだりでしょう。
- (9) 祖父はこの頃は寝たり起きたりの状態です。 (寺村 1991:221)

これを受け、森山(1995)は、タリには、

複数の事態が並列的に並べられるという基本的な意味「結合的並列」としてまとめている。

また森山(1995)は、タリによって列挙される内容は、その要素だけですべて尽くされているわけではなく、まだほかのことがあるという可能性を残している、一部列挙であることも指摘する。たとえば、ホテルで散歩や水泳以外のことをしていた場合でも次の(10)のように言うことができる。

- (10) ホテルでは、散歩をしたり水泳をしたりしていました。
- (11) ホテルでは、散歩をしたりしていました。

さらに、(11)のように一つの要素だけでも一部列挙としてタリを使って表現することができる。しかしこの場合もタリの基本的意味にあるように、必ず並列的な複数の事態を暗示しているとされる。

2.2 同類を束ねる「ナンカ」

ナンカに関しては、次頁の(12)(13)に示すような「一種の接尾辞として、いくつか同類の名詞(A、B(、C、D……))を並べた後に付けて、<……のような種類のもの>という意味を添えるのが従来の用法」(寺村(1991:185))であるとされる。寺村は、ナドについて論じているが、「取り立て助詞と見られるナドは、くだけた会話では「ナンカ」「ナンテ」となることがある」(寺村(1991:181))とも述べており、本稿でも、ナンカをナドの口語的表現ととらえ、共通する特徴をもつものとして扱う。

(12)八さん、熊さん、御隠居さんなどが登場する。(寺村 1991:185)

(13)庭には、朝顔、向日葵なんかが咲いている。

ナンカもタリの場合と同様、すべての要素を挙げ尽くしているのではなく、明示された要素以外に、まだ他に何らかの残されたものがある可能性を示している。

このように、タリもナンカも取り上げたもの以外に残されたものがあることを示すことから、何らかの共通性を持つ複数要素のなかから一つあるはいくつかを例として示す例示表現形式であるといえる。

3. 質的例示のタイプ

ところが、実際には、一つの要素のみを取り上げたとき、残されているはずの同類のものが想起できない場合も多くある。

(14)私なんか全然だめです。

(15)今日いきなり学校が休みになったりしたらいいのに。

このような場合、例示表現形式で示されながらも取り上げられた要素以外の、他の要素が想起できなければ、明示された要素の何らかの特性、属性に注意が向けられると考えられる。

本稿では、一つの要素のみを取り上げ、残されているはずの他のものが想起されない(問題とされない)例を「質的例示」と呼ぶことにする。この質的例示による一例の呈示の仕方がタリとナンカでは異な

るとというのが本稿の主張の一つである。

さきに結論を示しておく、タリによる例示は、なんらかの質的な前提を認めたとうえで、そこに新たな要素を追加する「追加タイプ」であり、ナンカによる例示は、要素の質的な特性や属性を改めて定義し呈示する「定義タイプ」である。

このように例示のタイプを分けて考えることによって、様々な語用論的効果の説明も可能になるのである。

以下では、タリ、ナンカの複数要素を扱う用法との関連から一つの要素を取り上げた質的例示の仕方に違いがあることを具体的な分析から明らかにしていく。

4. タリ

4.1 非対称的並列と質的例示

森山(1995)は、タリが一つの要素だけを一部列挙としてあげることができるとしたうえで、行為を質的に問題にする文脈においては、一部列挙の意味が異質なものになると指摘する。

(16)君、小さい子をからかったりしてはいけないよ。(森山 1995:138)

(17)さっきは、しんのすけにどなったりして、悪い父親だ。(同:138)

(18)きのうは、しんのすけにどなったりして、一日が過ぎた。(同:138)

(16)を予防的な禁止として言う場合にはそれに類すること(例えば、泣かせたり、いじめたり)が比較的想起しやすいが、実際に「小さい子をからかう」ことを止めるように言う場合、事実上禁止するのは一つのことだけである。同様に、(18)では、他のこととして一日が過ぎたとい

う読みが可能であるのに対し、(17)では、実際に問題になっているのは「どなった」ことそれだけで他に何かをしたわけではない。(16)の禁止や(17)のような悪いという行為の質を問題とする文脈においては、実際には一つのことを指しながらも類として取り上げる表現タリを用いることによって、禁止すべきことや悪いことという、その質に着目していることを示している。

このように、タリは、ある種の属性を問題とする文脈で、その並列的な同類集合を示すことから、質的意味を問題とする働きへと転化していると森山(1995)でも述べている。

4.2 対称的並列用法と質的例示

森山(1995)で指摘された質的例示が同類的なグループを暗示する非対称的な動作・行為を並列する用法からの派生用法であるのに対して、対称的な動作・行為を並列する用法から派生する質的例示もある。

(19) [新しいアルバムについてのインタビューの中で] 気楽にやったように聴こえる曲ほど、実は一生懸命だったりするんです。(ケ)

(20) [取材しながら書く社会派小説作家に対し、筋を見失わないためにどうしているかという質問の答えとして] 予定外の人が登場して話を転がしてしまうこともあります、その人が意外に好評だったりすることもあるんです。(作)

(21) [女優の人柄について] ああいう一見派手なのが案外中身は古風だったりす

るんです。(陣)

これらの例では、タリで取り上げられた事態に対して、それぞれ対称的な事態が想定される。(19)であれば、実は一生懸命やったという事態に対し、気楽にやったように思われること、(20)では、実際には意外と好評であったのだが、小説の筋がわかりにくくなり読者に不評だろうと思うこと、(21)では、案外、中身は古風であったという事実に対し、見た目が派手なら中身も派手だろうと思うこと、というように、当然そう思われるであろう対称的なことがら読み取れる。

ここから、対称的な事態のうち、生起可能性の比較的低い事態がタリによって取り上げられることがわかる。また、(19)~(21)には「実は、意外に、案外」などの語句が共起することからも明らかのように、タリで取り上げられた事態の「意外性」が示される。

森山(1995)で冗談の用法として示された「うどんにマヨネーズかけたりして」も、この意外性によって説明が可能となる¹⁾。すなわち、タリを用いることによって「うどんにマヨネーズはかけない」という通常の状態を暗示しながら、対称的なうどんにマヨネーズをかける事態の意外性が示されているのである。このような意外性から面白さが生じ、冗談の用法としても使われ得ると考える。

4.3 例を付け加えるタリ

4.1 と 4.2 では、タリに非対称的並列用法、対称的並列用法それぞれからの質的例示用法があることを示したが、その例示のタイプは、前提にたいして例を並

べ付け加えるという点では、共通である
と考える。違うのは、前者で取り上げら
れる要素は、前提に問題なく含まれるで
あろう典型例であり、後者は前提には含
まれにくい周辺例であるということだけ
である。

例えば、「小さい子をからかったりし
てはいけない」という非対称的並列から
の例示用法の例では「小さい子をからか
う」ことが「してはいけない」ことの典型
例と考えられる。逆に「うどんにマヨネ
ーズをかけたりして」というような対称的
並列からの例示用法の例では、「七味を
かける」というような典型例ではなく、
うどんに何かをかけることに関しての周
辺例となっている。

典型例であれ、周辺例であれ、タリの
例示は、X Tari Y タリの並列的結合と
いう基本的な用法から、タリで取り上げ
た要素に関連したなんらかの前提を踏ま
えたうえで、並列的に例を追加するタイ
プであるということができる。

5. ナンカ

5.1 評価の含意(先行研究)

本節では、タリ同様、一つの要素につ
き、かつ、残されているはずの、類する
何かが具体的には想起できない質的例示
のナンカについて考察する。

寺村(1991)では、ナドが唯一一つの名詞
(X)につく場合もあり、評価的意味が暗
示されるとした。

(22) 私などにはとてもできない。

(23) 山崎編集長などにそんなことされて
たまるか。(寺村 1991:186)

上のような例を挙げ、「X ナド P」と

いうと、話し手の頭の中に非常に<高い
存在>があり、それとの関連で X のよ
うに<低い>ものが P することが思い
もよらないという意味が暗示される」と
し、ナドには「低評価」の含みがあると述
べている。さらに寺村(1991)では、ナド
を自分のことに用いると謙遜、相手や第
三者に用いると軽視の意味が含まれると
した。これらのナドはナンカに置き換え
ても同様のことが言えるだろう。

また別の先行研究においてもナンカが
評価的な側面を持つという点が指摘され
ている。沼田(2000)では「ナンカ」を、並
立詞、とりたて詞、間投詞で区別し、一
つの名詞に付くとりたて詞は、擬似的例
示と否定的特立という二つの用法に分け
て記述している。この中で、否定的特立
の含みの想定が、事柄の妥当性や適切性
といったこと(=評価)に関わると指摘す
る。

(24) よりにもよって、太郎なんかが僕の
誕生パーティーにやってきた。

(沼田 2000:195)

この例では、「太郎がやってくる」が真と
なることの適切性が話し手によって「否
定」されている。明示された太郎が、来
ることが当たり前と想定される次郎や花
子という他者と比較して、やって来るべ
きでない、著しく適切性を欠くものとさ
れる。そこで、太郎に対して、花子、次
郎と比べての相対的な評価が加わること
になるとしている。

また、庵他(2001)では、話者の「検討
の範囲を外れている」事物を取り立てて、
それ以外のものを暗示するとしている。

(25)私はダイヤの指輪なんかほしくないわ。
(庵他 2001:367)

社会通念から考えてそれ自体が低評価だと思われるものを取り立てる場合が多いが、(25)のように、低評価でなくても話者が自分の検討の範囲を外れている事物を取り立てる場合もあるとしている。

このように先行研究では、ナンカに評価の含意があることが指摘されている。しかし、なぜ、本来複数の要素をまとめてくそのような類のもの>としてマークするナンカによって評価が含意されうるのだろうか。

5.2 定義づけと評価

たとえば、筑波山という、日帰り登山で人気のある山に、これまでに三度も登ったと自慢するAに対し、Bが返答する場面を考える。

(26) A：昨日、筑波山、登ったんだ。もう三回目。

B：ぼくなんか富士山に毎年登ってるよ。

(cf. ぼくは富士山に毎年登ってるよ)

(26)Bでは、まず「ぼく」以外の他の要素を想起して「ぼくの他に太郎や花子も富士山に登っている（登山をしたことがない）」というような解釈は不可能である。Aの自慢に対し、「筑波山」より高く、それも日本一の「富士山」に、「三回」よりもずっと多い「毎年」登っている「ぼく」をナンカで示している。

このとき、Aの自慢に対して「ぼく」は「Aが考えるよりもっとすごい登山経験

があるんだ！」という自慢返しとでもいうべき発話として理解することができるだろう。

逆に、次のような場合にもナンカを使って返答することができる。

(27) A：昨日、筑波山、登ったんだ。もう三回目。

B：ぼくなんか登山したことないよ。

(cf. ぼくは登山したことないよ)

(27)では、Bは「登山経験のないぼく」をナンカによって示すことで、Aの自慢に感心する発話として聞かれる。

しかし、次のような場合には、ナンカを用いるとAに対する返答としては不自然になってしまう。

(28) A：昨日、筑波山、登ったんだ。もう三回目。

?B：ぼくなんか二回登ったことあるよ。

(cf. ぼくは二回登ったことあるよ)

この場合でもナンカを使わずに「ぼくは二回登ったことあるよ」というのは問題なく言える。「筑波山に三回登った」Aの自慢に対し、「富士山に毎年登る」や「登山経験なし」の「ぼく」ではナンカが使えるのに、相手とあまり変わらない「筑波山に二回登った」「ぼく」にはナンカが使えないことはどのように説明できるだろうか。

ナンカが、単独要素に付いたとき、属性、あるいは質的側面に注目するという点ではタリと同様である。ただし、本来

タリが「X タリ Y タリ」と並列的な形式をとるのに対し、ナンカの場合には、「X ナンカ Y ナンカ」と並べたり、「X ナンカ Y」のようにナンカの後ろに要素が来たりすることはできず、「X、Y ナンカ」と複数要素の一番最後に付いてそれらの要素をまとめるという形式をとる。このことから X ナンカとする場合、X の質的な側面に注目すると同時に「ひとまとまり」として捉えることが表わされる。つまり、単独要素 X にあえてナンカを付けることによって、その要素の属性をまとめ、定義付けていると考えることができる。また、先行文脈においてすでに要素 X に関連する話題があれば、X を改めて定義する必要がある場合にナンカが使われると考えられる。

先の自慢返しの例((29)に再掲)に即して言えば、A が自慢できる相手だと思っている「ぼく」をもっとすごい登山経験のある「ぼく」として再定義したことをナンカによって示しているということである。

(29)ぼくなんか毎年富士山に登ってるよ。

再定義することは、とりあげる要素に新たな属性を認めることになり、このことが、先行研究で言われる評価の含意につながると考えられる。たとえば、ナンカを付けることで自分を低評価することが謙遜につながるとされた例も、ナンカによって自分を再定義していると捉え直すことができる。

(30)A：お上手ですね。

B：いえ、わたしなんか全然。

(30)ではAがほめた「わたし」とは違う全然だめな「わたし」をナンカによって再定義して示していると説明できる。

文脈から判断して相手(あるいは両者の間)の前提を覆す、あるいは定義し直す必要がなければ、ナンカを用いることはできない。そのため、登山の例の三回に対する二回というような、わずかな差を単に述べる場面ではナンカを使うことができないのである。ただし「二回しか登ったことがない」として、Aよりずっと登山経験の浅い「ぼく」というようにナンカで再定義して呈示することは(27)の一度も登ったことがない例と同様、可能である。

(31)A：昨日、筑波山、登ったんだ。もう三回目。

B：ぼくなんか二回しか登ったことがないよ。

また、次の例もナンカによる定義付けという点から説明が可能である。

(32)私はダイヤの指輪なんかほしくないわ。
(庵他 2001:367)

ダイヤの指輪という世間一般の常識(高価なもの、素晴らしいもの)に対して、「ほしくないもの」としてダイヤの指輪を定義付けて呈示しているのである。

ナンカの場合もタリ同様、周辺例と典型例がある。ピアノのレッスンに通い始めて三週間という友達がショパンの曲を練習するというのを聞いて、「えっ、もうショパンなんか弾けるの?」と聞く場合が周辺例であるのに対し、ピアノの

レッスンに長年通うという友達に「たとえばショパンなんか弾けるの?」と聞くのは典型例である。

このように考えれば、沼田(2000)の擬似的例示とするもの(33)は、この典型例に相当し、否定的特立(34)は周辺例として考えることができる。

(33) 竹本さんなんか、来春結婚する10組の中にはいっているんじゃないの。

(沼田 2000:194)

(34) よりにもよって、太郎なんかが僕の誕生パーティーにやってきた。

(沼田 2000:195)

典型例であれ、周辺例であれ、ナンカの例示は、類的なものをまとめるという基本的な用法から、ナンカで取り上げた要素について、その状況における話者の注目する質的な属性によってまとめ直して示すというタイプといえる。

6. 例示タイプと語用論的効果

ここまで、タリ、ナンカそれぞれの、単独要素につき、かつ、他の具体的・類的要素が想起できない質的例示について考察した。

タリは「それもあるけれどこれも」というように前提の存在を認め、そこに新たな例を付け加えるという例示の仕方であるのに対し、ナンカは「(そうではなく)こうだ」というように、前提となることに対して(改めて)定義して示すという仕方であることが明らかになった。

(35) タリの例示 : 追加タイプ

ナンカの例示 : 定義タイプ

例示の仕方の異なりは、その語用論的効果にも影響を及ぼす。

(36) A : 昨日、筑波山、登ったんだ。もう三回目。

B-1 : ぼくなんか富士山に毎年登ってるよ。

B-2 : ぼくは富士山に毎年登ってたりするよ。

(36) B-1 はナンカを使うことでAの自慢を無効にするような自慢返しとなるが、B-2 ではAの自慢を認めながら、自分のことも付け加えて述べていると受け取ることができる。

このようにタリは、新たな案も認めてほしいという態度を示すことができるが、ナンカは改めて定義をし直すことによって、文脈によっては前提を否定するような態度として示される。そのため、ナンカは次のような反論場面などでもよく使われる。

(37) A : うそついてるでしょ

B : うそなんかついてないよ!

7. 依頼文脈におけるフェイス配慮

語用論的効果は文脈によってさまざまなものがあるが、冒頭に例として示した依頼の場面では、タリもナンカも同じような効果を見せるように思われる。

Brown and Levinson(1987)に拠れば、依頼は言語行動の中でも、本質的にその相手のフェイス²⁾を傷つけやすいものであり、話し手の欲求が聞き手によって満たされることを求める行為である。聞き手は依頼を承諾することによって行動の

自由が奪われ、自己の領域を侵されることになる。要するに、聞き手のネガティブフェイスを侵害する行為である。

そのようなフェイスを脅かす危険性の高い行為において、タリやナンカはその語用論的効果によってフェイス補償をしていると考える。

- (38)a. その本、しばらく貸していただけたりしませんか。
b. あのう、サインなんかしてもらえないでしょうか
c. 突然でほんとうに申し訳ないんですけど、来週のゼミ発表かわってもらえたりなんかしませんか。

タリやナンカを使わなくても依頼として成立する場面で、あえてそれらを使うことによって話者の一定の態度を示しているのである。a. では、意外な例を一つ付け加えた形で示すことによって、まさか貸してもらえとは思っていないと示している。また、b. では、サインというものを定義し直すべきものとして扱っている、すなわち、なにか特別なものであるという認識を呈示しているのである。c. のタリとナンカの重ね型も同様で、当然のことではなくかつ特別なお願いであることを示している。その際、依頼が実際に特別なお願いに相当するかどうかは問題ではない。「相手が当然受け入れることではない」という認識と同時に、依頼が受け入れられる可能性は低いという認識を示すことが、相手の行為の自由を奪うつもりが少ないこと、つまり相手のネガティブフェイスに対する配慮となるのである。

このように、タリやナンカの質的例示の使用が相手のフェイス配慮へとつながるのである。

8. 自己フェイス保持

タリやナンカの質的例示の使用は、相手のフェイスを補償するだけでなく、自己のフェイス保持にもつながる。

特に、自分の利益、あるいは利益につながるような情報を他人に伝えるときには、自慢をしているようにとられる危険性が高い。そのようなときに、タリやナンカを用いることで自己のフェイスが保持される。

- (39)銀座で一万円のランチなんか食べてきました。
(40)お正月休みにバリなんか行っちゃいました。
(41)今日は私の誕生日だったりします。

(39)の「銀座で一万円のランチ」や(40)の「お正月休みにバリ」は、ナンカで取り上げられることによって、自分にとっては日常起こりうることではなく、わざわざ定義しなければならない特別なことという含意を持つこととなる。そして、私は「そういうことを当然のようにする人間ではない」ということをアピールし自己のフェイスの保持へとつなげている。(41)の「誕生日だったりする」も他の人にとって今日が何の日であるかという前提がそれぞれにあるだろうが、そこに付け加えられる一つとして私の誕生日があるということを示す。誕生日だということをも真つ向から宣言(し、お祝いを請求)するような図々しい人間ではないと示すこ

とで自己のフェイスの保持を行っていると考えられる。

9. まとめ

本稿では、一例として取り上げながらも他に具体的なものを想起できない質的例示のタイプに少なくとも二種類があり、その例示の仕方が、語用論的效果を生じさせる所以となっていることを述べた。

タリは、前提を認め例を付け加える追加タイプ、ナンカは、新たに例の性質をまとめ直す定義タイプの例示形式であり、それらの例示タイプを用いることで、これまでのタリやナンカの様々な用法が統一的に説明可能となることを示した。また、タリやナンカによって、相手のフェイスへの配慮や自己のフェイスへの保持が行われていることも明らかにした。

今後はさらに他の例示形式も考察の対象とし、これらの二種のどちらのタイプに当てはまるのか、あるいは、また新たな例示タイプがあるのか、またそれらから生じる語用論的效果にどのようなものがあるか、などについても記述していきたい。

注

- 1) 森山(1995)では、うどんにマヨネーズをかけたりしたら「おもしろい」という性質を強調するものとして、質的例示の派生用法としている。
- 2) Goffman(1967)で提唱されたフェイスという概念を Brown and Levinson はネガティブフェイス(negative face)とポジティブフェイス(positive face)という人間誰もが持つ二つの欲求として

捉え直した。ネガティブフェイスとは、自己の領域を邪魔されたくない、行動の自由を守りたいという欲求で、ポジティブフェイスとは、他者に受け入れられたい、認められたいという欲求である。そしてこれらの欲求が、フェイス侵害行為(Face Threatening Act, FTA)によって満たされないときには、さまざまな方法によってそれを補償したり回避したりしてフェイスを保持しようとする。この人間誰もが持つという二種類のフェイス欲求への配慮が言語行動選択の普遍的な動機であるとされる。

用例出典

(ケ)http://magazine.music.yahoo.co.jp/spt/20070829_001/interview_002

(作)http://www1.e-hon.ne.jp/content/sp_0031_m_kouda.html

(陣)http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1110353846

引用文献

- Brown,P.&Levinson,S.C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage* Cambridge: Cambridge University Press
- Goffman,E(1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, Garolen City, New York: Anchor: Doubleday(浅野敏夫訳(2002)『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学—』法政大学出版局)
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと

意味 第三巻』くろしお出版

沼田善子(2000)「(第3章)とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店

森山卓郎(1995)「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって—」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版

村田美穂子(1994)「ぼかし表現の新方向」『国文学解釈と鑑賞』59-7 至文堂
(筑波大学大学院生)

◇表現研究関係文献紹介

田島優『漱石と近代日本語』(翰林書房、平成21年11月刊、¥5,040)

著者の田島優氏には既に『近代漢字表記語の研究』(和泉書院)、『現代漢字の世界』(朝倉書店)という二冊の単著があり、氏が近現代漢字表記に関する優れた研究者として活躍されてきたことはよく知られている。

その田島氏がこの度、表題の著書を世に問われた。田島氏は本書でも漱石の漢字表記を考察されており(第8章)、かつ従来の表記研究も、語の意味・用法、語と語の関係等と密接に関係づけながら記述されてきたことは言うまでもないが、本書は、表記に関する諸点以外の、幅広い視野からも漱石の言語を考察し、近代日本語史に位置づけようとしている点で、氏の新局面を示す意欲作と言える。

以下、章立てを紹介する。

1章. 近代日本語資料としての漱石作品 2章. 漱石の生涯と近代日本語 3章. 違和感 4章. 漱石と江戸語 5章. 語の移り変わり 6章. 翻訳語法の定着 7章. 話しことばの移り変わり 8章. 漱石の表記と書記意識

本書の記述の魅力は多岐にわたるが、ここに一点を挙げるならば、1章と2章において漱石の言語研究に関する懇切丁寧なオリエンテーションが行われていることである。既に漱石作品を扱っている研究者にとってはもちろん、これから学ぼうという初学者にとっても、本書は必携の文献となるに違いない。

(多門靖容)